渋沢栄一物語 Shibusawa Eiichi History

【第7回】

一橋家へ仕官

決行間近の十月二十九日の夜、尾高家の二階に、京都より戻った長七郎をはじめ、惇忠、栄一、喜作、中村三平（海保塾）が集まります。

長七郎は、京坂方面の情勢を語り、決起に反対します。なぜかといえば、八月十八日、京都では、会津藩と薩摩藩により、攘夷派の急先鋒であった長州藩の勢力が一掃されたこと。これに前後して、天誅組が大和五条の代官所を襲ったが、諸藩の勢力によって壊滅させられたこと。栄一たちによる決起は、百姓一揆に同じく、何の効果もないこと。そのために何十人もの同志の尊い命が失われてしまい、自分はあくまでも反対である、というものでした。

自説を曲げない長七郎の態度に、激怒し、反論する栄一ですが、冷静に考えてみれば長七郎の言うことが正しく、ここは決起を思いとどまるしかないと、覚悟するに至ります。

決起を中止したとなると、幕吏による探索の目が気になります。栄一と喜作はこれを逃れるため、お伊勢参りと偽り、十一月八日、そろって郷里を出奔します。一橋家の重臣平岡円四郎を頼り、江戸を経て、京都を目指します。

京都に着いて、平岡へのあいさつも済まし、情勢を探る中、元治元年（一八六四）二月の初め、栄一と喜作を驚愕させる出来事が起こります。江戸伝馬町の牢に入れられた長七郎からの手紙が届いたのです。長七郎が戸田ヶ原で誤って通行人を斬り、その時所持していた栄一からの手紙には幕政を批判する内容が書かれており、いずれそちらにも探索の手が伸びるであろうとありました。折も折、平岡から呼び出しがあり、幕府から問い合わせが来ている、お前たちは何か悪事でも働いたのかと、問い詰められます。ここに至って両人は正直に事情を告白。これを聞いた平岡は一橋家への仕官を勧め、もはやこれ以外に幕府の探索の手を逃れる道はないことを諭します。

進退ここに窮まった両人は、平岡の言葉に従い、一橋家への仕官を決意します。（文：新井慎一）

▲尾高弘忠（長七郎）の墓（下手計）

物語の手引き

『文久3年8月18日の政変』

会津・薩摩両藩を中心とする公武合体派が、長州藩を中心とする尊攘派を京都から追放した事件です。当時、朝廷は三条実美らの尊攘派が主導権を握っていました。彼らは長州藩と結び、外国に対し弱腰な幕府を倒して、天皇による政治を実現すべきだと考えていました。しかし、孝明天皇はむしろ朝廷と幕府が協調していこうという公武合体派でした。そこで、孝明天皇と公武合体派の公卿・諸大名は、会津藩と薩摩藩の提携を機に、朝廷内部のクーデターを図ったのです。

『天誅組』

江戸末期に、土佐・鳥取・久留米・熊本などの脱藩士が結成した討幕尊攘の最激派です。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ 熱・中・時・間

～青木旭さん・美枝さん（小前田）～

鐘撞堂山の恵みを次代へつなぐ

標高330・2m。ふるさとの森として親しまれている鐘撞堂山では、この時期、美しい日の出を眺めることができます。

「元旦には、100人を超える人が集まるんだよ」

そう教えてくれたのは、小前田にお住まいの青木さんご夫妻です。お二人は、この里山を守り、次代につなげる活動として『鐘撞堂山だより』を発行しています。

鐘撞堂山だよりの創刊は、平成17年12月。山中で発見されたマムシへの注意喚起のため、チラシを作成したのがきっかけです。不定期ながら発行を続け、鐘撞堂山が魅せる四季折々の表情を伝えてきました。

旭さんと鐘撞堂山との関係は、平成13年から。花園町が山の活用方法を検討するために立ち上げた委員会へ参加したことに始まります。道なき道を分け入っては、登山道の整備方法などを検討しました。また、美枝さんは平成11年、肺に大病を患い手術を受けました。そのリハビリのために選んだのが鐘撞堂山に登ることだったそうです。

以来、ほぼ毎日のように登っているお二人は、近年の山の変化に心を痛めています。ヤマユリやシュンランなど、かつて山道脇に多く見られた山野草が、年々少なくなってきているのです。

「森はみんなのもの。マナーある楽しみ方を共有し、みんなで守っていきたい」

鐘撞堂山だよりは、そんなお二人が示した『山を長く楽しむためのバイブル』なのです。

▲12月7日には最新号（第17号）が発行されました。市内では、図書館やキララ上柴で閲覧できます。

ありがとうの手紙

優秀賞
中学生の部
お姉ちゃんへ

岡部中学校3年（現高校1年）　松島遥さん

お姉ちゃん、いつも迷惑かけてごめんなさい。

私がいじめられて泣いていて、家族に言えなかったとき、一番早く私の異変に気付いて、何も言わず抱きしめて、「何もできなくてごめんね。」と言って、一緒に泣いてくれましたね。いつもあなたはこんな弱い私を守ってきてくれた。私より先に生まれた人生の先輩となるように、私を導いてくれましたね。

いつも私のことを考えてくれたお姉ちゃんに、何億回ものありがとうをおくります。

夫婦道のススメ

支え合う心大切に

川田平八さん（75歳）
竹子さん（73歳）

中瀬にお住まいの川田さんご夫妻は、結婚49年目。「支え合って生きていけば、必ず結果はついてくる」。平八さんのその力強い言葉にひかれ、竹子さんは長男の嫁を決心したそうです。共働きでの子育ては、母親と祖母に支えられ感謝の毎日でした。現在は、101歳になる母親を支えながら、2人そろって積極的に公民館事業に参加するなど、地域や趣味仲間のコミュニティーも大切にしています。夫婦円満の秘訣は、感謝と思いやりだそうです。